

50年後の国づくりに向けて
—身近なことで環境保全を理解しよう—

(株)電発環境緑化センター

フェロー会員

○ 清水 秀昭

(株)電発環境緑化センター

高江洲 悟

50年はとてつもなく長い時間か

環境保全と言うと、これだけで考えることを止めてしまうのが普通であろうが、「50年後の国づくりに向けて」考えるとなれば、耳に、目にすんなり入ってくるような考えである必要があろうと思う。50年後となるとかなり時間が経過した時代のことのように思えるが、自分が過ごしてきた時間を考えてみれば、たいして長い時間でもないように思える。

50年近く経つとどのような変化が生ずるか

自分がサラリーマン生活を送り始めてから、もう40年程経過しているが、ぼんやり毎日を過ごしていても気が付くような変化は、通勤電車が全車両冷房車になって、常磐線で柏から上野につくまでの間に通過する江戸川、荒川、隅田川の3本の河川の鉄橋を渡る時、今は窓を閉めているため気が付かないが、昔は冷房も無かったためか、窓は開いていた。このため、川が臭気を発生していると変な匂いが車内に漂ったものである。

これは、オイルショック（昭和47年）以前の話であるが、この匂いはどうにかならんかと思っているうちに匂いも次第に薄れていった。昭和47年の環境庁の発足以後、悪臭防止法の制定以後のことであったようである。

今では、江戸川、荒川、隅田川の3本の川もかつての黒い水の流れは薄れ、荒川の河川敷のように親水性、有孔空間の確保を狙った石張り、薄が原の設定などビオトープ様に整備されてきた。

このように、過去を簡単に振り返ってみれば、50年はさほど長い時間ではない様に思える。

過去を振り返り将来を展望すると

「50年後の国づくりに向けて」と言っても基本的には現在と大きくは変わらないと思っている。

しかし、「50年後の国づくりに向けて」と言うことで、現実的な見方をすれば、どのような分野においても、経済状況が今程度であるとすれば、今よりは整備された快適な環境の中に我々は生きているであろうと想定される。

具体的に言えば、都市間を結ぶ幹線道路は殆ど整備され、かつては合流部などで渋滞し朝夕のラッシュ時には身動きの出来なかった部分も車は円滑に流れるようになっている。道路の街路樹は新宿のビル街の樹木のように大きく成長し、我々に木陰を提供してくれると共に、いざと言う時には防災的な役割も果たしてくれるように頼れる存在となっているであろう。

また、ビルの屋上や壁面はかなりの部分が緑化され、将来はヒートアイランド現象によって、大幅に気温が上昇すると心配された都市部も、随所で屋上緑化や、壁面緑化によって気温が予想されたよりは上昇せず、ヒートアイランド現象も克服されている。

50年は長いのか、過去を振り返る、ヒートアイランド、光合成の成果、牛、

これは単にキズタやカズラ類が時間の経過によって壁面に食込んだのではなく、品種改良や成長の制御が各種材料のコストダウンと共に可能となり、緑化しようと思えば比較的容易に実現できるような時代になっている。

各種の社会基盤整備は、基本的には満たされているが木目細やかさと言う点では、今一步という状態がつづいていたが、工事の漸減に伴って、生物の多様性の確保、生息環境の維持、ミチゲーション等これまで省みられることが少なかった事柄にスポットが当てられ、木目細かい配慮の下に各種開発プロジェクトが展開されるようになってくる。

環境と言われるのはどの程度の範囲だろうか

地球の半径は約 6400km と言われているが、我々が高頻度で利用している部分は、上空は飛行機が飛ぶ部分、1 万数千 m、地表に至っては石油採掘の 1 万数千 m が大きい程度で、農耕、森林に至っては数十 cm の深さで利用されている程度であると思われる。もちろん、人工衛星やオゾン層は別格であろうから、通常、環境保全の対象とされる部分は、地球上の極々限定された、地球の極めて薄い部分であろう。この部分を我々は考慮の対象とすれば良い様に思う。

環境保全と言うと、炭酸ガスのような地球規模の環境保全が念頭に浮かぶが、そんなに大規模なことを念頭に置かなくとも環境を今以上に良くしていくことが可能であろうと思われる。この際、環境には自然治癒力もあることを念頭に置くことを忘れてはならない。

何故、環境が我々にとって大切なのか

我々にとって環境が重要だと言う理由は、食物連鎖を考えても解るとおり、地球の上で生きとし生けるものは関係があり、この連鎖がどこかで切れると、特定の生物が生きていくことが困難になることが生ずる。このような事実から、環境と言うものは我々の生命維持装置であると言えよう。

したがって、この生命維持装置を保全することは極めて重要であると考え。このような事実も、一言で簡単に言えば解りやすいのではなからうか。

環境の大本は光合成である

光合成と言うと、水と炭酸ガス、N、P、Kから緑を創り出すことであると私は思っている。より具体的に言えば、光合成の成果は最近大いに話題に上る B S E、いわゆる狂牛病で有名になった牛が光合成の成果であろう。牛も本来は肉骨粉で成長するのではなく、光合成の一方の成果である草を食べていれば B S E にならず済んだであろうが、この経済情勢の中ではやむを得ない部分があるのであるであろうと思っている。

50 年後の国づくりに向けて何をするか

前述のとおり、環境保全は緑化が基本となる。しかし、この緑化も、単に何でも緑化すれば良いと言うことではなく、プロジェクトの跡を整備しようとするのであれば、その周辺の植生の状況を詳細に調べ、樹木の生えている密度、優先樹種、食餌植物の混合の度合い等を明らかにする。さらに、パイロット樹種を選定し、優先樹種が良く生育するように配慮していく。また、森林を形成する樹木が階層林をなすようにする必要がある。これにより、鳥類が大幅に増大するとされ、生物の多様性の維持にも大いに寄与するであろう。

環境保全を図った場所に、水辺を設けた場合生物の多様性は見ただけでも大幅に増え、遠方から飛来する生物も受け入れ、一挙に種の増大が見られるようである。したがって水辺を設ける場合、近隣の水辺の状態も考え、地域全体がネットワークを形成するようにすれば、より効果的なビオトープネットワークが形成されよう。

この一例のように、各種の配慮をした上で緑化を実現していけば、より良い国土が現出するであろう。